

アイデア得ることも



魚豊さんのペンネームの由来である鱧（はも）のイラスト（©魚豊）

うおと 1997年生まれ。東京都出身。迫害を受けつつ地動説を追求する人々を描いた「子。地球の運動について」(小学館)で2022年、手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞。次作「ようこそ！FACT(東京S区第2支部)へ」(小学館)では陰謀論を扱った。陸上の100m走を題材にした「やくえむ」(講談社)の劇場アニメ版が25年9月に公開された。

魚豊さん

漫画家

新聞記者は、漫画家以外でやりたい仕事の一つだった。新聞記者が登場する映画が好きで、その中でも、神父による児童への性的虐待を報じる米国の地方紙を題材にした「スポットライト 世紀のスキャンダル」が大好き。自分の足で真実を取りに行くところに職業の魅力を感じる。

新聞は実家のような存在だ。みんな本当は心のどこかで信頼している。多様なメディアができて、流通している情報は玉石混交だ。



漫画「子。地球の運動について」の登場人物・ラファウ（©魚豊/小学館）

伝統的な方法でエビデンスを取る新聞の存在感は増しているのでは。

新聞は紙ではなく電子版を購読している。インターネットやLINE(ライン)でもニュースに触れている。ニュースから漫画制作の着想を得ることも多い。

陰謀論を扱った「ようこそ！FACT(東京S区第2支部)へ」を描いた際は、陰謀論集団「Qアノン」に関する記事を読み込んだ。

7月の参院選でファクトチェックが話題になった。一部の有権者にとって事実か否かはもはや重要ではなく、説得力や納得感を重視している。陰謀論の漫画を描いた時に思ったが、事実を事実として信じてもらうのは難しい。それでもファクトを提示し続けることは

絶対重要で、社会の底が抜けないのは、そうやって闘っている人がいるからだ。

一方、ファクトチェックとは別の角度から説得する方法を考える必要がある。自然科学の正当性や根拠を担保するのは、最終的には専門家に対する信頼にあり、それによって近代社会は発展してきたと思う。事実を事実として認めない人たちが現れるような信頼が崩壊した社会で、他者に考えを改めさせるのは、心からの対話だ。他国と比べ、日本には特定の政党の盲目的な支持者が多いわけではなく、対話の可能性は十分に残っている。